# 隨筆百花苑

## 第十卷

森銑三
野間光辰
中村幸彦
朝倉治彦
編

中央公論社

隨筆百花苑　第十卷

定價　四八〇〇圓

昭和五十九年十月　十　日印刷
昭和五十九年十月二十日發行

編者　森銑三
　　野間光辰
　　中村幸彦
　　朝倉治彦

發行者　嶋中鵬二

印刷者　山田博

發行所　中央公論社
〒104 東京都中央區京橋二―八―七
振替東京二―三四
©一九八四　檢印廢止
ISBN 4-12-401130-X

# 隨筆百花苑　第十卷

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次


敍言　宗政五十緒

凡例

異本翁草（抄）　神澤杜口　一

異本翁草總目　三一四

解題　三四九

# 敍言

宗政五十緒

神澤杜口編『異本翁草』を抄出して一冊とし、『隨筆百花苑』第十卷「風俗世相篇四」に充てた。

『翁草』には、流布本と、本文の大きく相違する異本とがある。流布本系の本文は夙く明治三十九年に池邊義象校訂の活字本が刊行され、更に、『日本隨筆大成』にも收められたので、人の知るところである。これに反して、異本系の本文については、語る人はなはだ少なく、わずかに森銑三氏が『隨筆辭典 解題編』その他で指摘した程度であった。本卷責任編集者はかつて、その中の卷八・九・十に收められている「無名氏隨筆 外題鶯笑子」を飜刻して單行出版したことがある（昭和三十七年六月、洛文社刊）。これが一部分とはいえ『異本翁草』の本文を紹介したただ一つの活字本のはずである。

今、飜刻に當って、卷一より卷五十までのうち、編集者の私意によって然るべきものを摘出して、『隨筆百花苑』の一冊に收めた。

なお、卷末に全卷の目錄を掲載し、これに、抄出諸章には＊印を付して、讀者の參考に供した。

# 凡　例

一、本文については、京都大學附屬圖書館藏の寫本によって校訂し、疑點については他本を參照するなどして補正に努めた。

一、漢字は原則として正字體を使用し、古字、別體字、俗字などはおおむね通行の字體に改めたが、底本の字體をそのまま殘したものもある。

一、底本には句讀點は施されていないが、讀み易いように適宜これを施した。また、漢文の句讀點、返り點、連字符についても、必要に應じて補ったものがある。

一、原則として、送り假名、振り假名は底本のままとしたが、濁點は、讀み易いようにこれを補った。但し時代的な特殊な表記などはこの限りではない。

一、假名の古體、變體、合字などは通行の字體に改めたが、明らかに片假名の意識をもって書かれたものは、底本通りとした。

一、原則として、脫字、衍字、誤字、宛字は底本通りとしたが、固有名詞や明らかな誤字などは訂正するか、行間または該當する文字の下に正しい字を（　）で添え、不明の場合は（ママ）とした。また、本文中の校訂者による注記は〔　〕で示し、本文と區別した。

一、底本の蟲喰い、破れ、汚れなどで判讀不可能の場合は、推定字數だけ□□を重ねて行間に注記し、推定可能の場合は、行間にその文字を示した。

一、底本に改行のない場合は、必要に應じて改行した。

一、天皇、將軍などの語に、闕字、平出のある場合は、すべて闕字の形で殘した。

一、卷末に「解題」を付し、作品及び著者の解說等を記した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 風俗世相篇四

責任編集　宗政五十緒

# 異本翁草（抄）

神澤杜口

# 翁草序

人のこゝろはおもてのごとひとしからぬがうちに、おのれ〳〵があるべきやう、はたおのづからにさだまれるなるべし。玉ちはふ神のむかしも、海山のさち〳〵ことなりとかや。其蜩庵のおきなは梓弓おきふし手ならす家にうまれ、仕ふる道にすゝみゆくものから、天雲のこゝろをたかくつかひてなん物をものとせず、やう〳〵としつもるころほひ、おろちのはかまぬぎ捨て、見かへりもせぬてふことのはをとゞめて身しぞき、花鳥にうかれ月雪にうそぶきたまへるは、世のひとにことなるさちなりや。さてしもつれ〴〵のなぐさめに、むかし今聞もし見もしを、かくともあはれともこゝろにうかぶことゞもを筆にまかせ、はたこと人のかけるものも、風の上にありかさだめずちりばひうせなんとおしみて、ひとつにとりいれつゝ、翁ぐさと題し給へる卷なん數つもりて、いまは二もゝに及べり。凡、日記、隨筆などいふものは、いにしへよりたれもすることにあれど、高き人はおほやけざまのことをのみしるし、儒佛の人、詩哥の人もおのがまなぶすぢをのみ書ものなれば、其道によらぬ人とりても見ぬを、此草子におきてはこの一ふしとわく色なくつどへ給れば、たれも〳〵其好むところによりてよろこぶべし。またひろきのかぎりならずや。もとよりこゝろことばのみやびはさるものにて、水くきのあとのみづ〳〵しきこと百たらず八十に過し老らくのしわざとやは見ゆる。かくすくやかにおはすれば、今ゆく末も谷水のながれつきせず、岸根ににほふ翁ぐさの霜をかさねて秋も幾あき、ことのはのはなのそひなんことのたのもしくて、ことほぎの筆をそむるものは、都の南の山がつ閑田子菁蹊、時はゆたけき政のとし三かへりの初春なり。

夫至人猶無名璞也、雖レ美天下無二敢知者一。故小隱隱二山林一、大隱隱二市中一。余友其蜩庵杜口老人者洛陽之隱士也。風月窓前稽二千古之治亂一、草玄牀上盡二世間之情態一、筆記有レ歳及三百有餘卷一、號曰二翁草一。其文澹泊易レ解、而其間有二至理存一焉。讀者漫々蕩々終不レ知レ倦、亦一奇也。余曾遊二河州一登二交野山一。層巖空穴之中微有二讀書聲一。認レ聲而到則有二一老翁一、蒼顏黃髮手執二一卷一儼然而坐。余問二其書名一、答曰翁草。余曰是其蜩菴之所レ著者乎。曰然。余曰翁遠避二世塵一隱二山巖中一、何故讀二世上之書一。曰否々、君未レ知二此書深意所在一、其文雖レ記二世上事一、意味玄遠而衆理具焉、蓋杜口翁者微妙玄通之士、而老莊之後身也。誰知其非下遊二無何有之鄉一入中妙玄之室上者乎。如レ余小隱者、纔得二其緒餘一、亦足三以樂二生涯一耳。乃驚歎久而歸、到二其蜩菴一以語二丈人一、丈人曰吾雖レ不レ知二其人一深嗜二吾書一、而能知二吾心一、此千載之一知已也。願聞二其姓名一、因再到二前所一、茫二失其所在一。唯山雲漠々泉韻松濤之外無二復影響一矣。悵然而歸、乃記二其事一以贈二丈人一云レ爾。

皆天明戊申春正月甲子日

同塵館主人瓘題

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com